

## 〈習作〉、あるいは〈改作〉というレトリック

—— 李恢成の「その前夜」と「死者の遺したもの」 ——

金 貞 愛

一、はじめに —— 年譜の改変と忘れられた〈処女作〉 ——

小説「その前夜」は在日朝鮮人作家李恢成の実質的な〈処女作<sup>1</sup>〉である。しかしその事実には気づくことは容易ではない。なぜなら、現在の読者が「その前夜」の存在について知るチャンスは非常に限られているからだ。この作品は一九六四年に在日朝鮮人を主な読者層とする総連系の雑誌『統一評論<sup>2</sup>』に発表されたのだが、それ以来一度も単行本に収められたことがない。作者自身もそのタイトルや発表雑誌をあげて公の場で発言することはほとんどなかった。そのことに触れた発言でも習作以上の評価を与えてはいない<sup>3</sup>。これらが批評で「その前夜」を見落としがちにさせる主な要因であり、とりわけこれについて作家自身の意図によって編集されたと思われる年譜の記述がもたらした影響は大きい。

李恢成は、一九七二年刊行の『新鋭作家叢書 李恢成集』（河出書房新社）に掲載した最初の年譜のなかで、一九六三年欄には「朝鮮新報社に転勤。在勤中、習作『夏の学校』——『新しい世代』、『その前夜』——『統一評論』と記し、のちに『その前夜』の改作と知られることになる「死者の遺したもの」（『群像』一九七〇年二月）については何の記述もしなかった。ところが、十年後の『芥川賞全集 第九巻』（文芸春秋、一九八二年）の年譜になると、一九六三年欄は「朝鮮新報社に転勤。在任中、習作『夏の学校』を『新しい世代』に、『その前夜』を『統一評論』に発表、『統一評論』賞を受賞する」（傍点・傍線・引用者）と改め、「死者の遺したもの」の傍らには「△『その前夜』を改作」という補記がなされている<sup>4</sup>。

約一〇年の時間差を置いて作成された二つの年譜をこうして並べてみると、両方の違いにすぐ気づくはずである。まず一九七二年現在において、読者が年譜を通して得られる情報は、「その前夜」が〈習作〉であるということだけである。そこでの習作という前置きは「夏の学校」と「その前夜」との両方にかかると考えたほうが妥当であろう。というのは、なによりも「死者の遺したものに」には何の注書きも施されていないからだ。しかし一九八二年の読者は「その前夜」が習作であるという事実に加えて、もう一つ、その作品が「死者の遺したものに」〈改作〉されたものという情報が与えられることになる。これらの年譜の改変が李恢成の目論見によるものにしるそうでないにしろ、そこでおこなわれた内容は注目に値する。つまり、李恢成の自作年譜は結果的にいえば、「その前夜」を〈習作〉とし、「死者の遺したものに」の〈原作〉に位置づけているということである。作家による情報の権威性によってであろうか、従来「その前夜」が研究レベルで単独に論じられなかったことはいうまでもなく、李恢成の作家活動および作品史を概説するときさえ、「その前夜」が取りあげられることは皆無に近く、「その前夜」に触れたとしても、それは「死者の遺したものに」の〈原作〉であるという認識にとどまっている。

このようにして「その前夜」は〈習作〉、または「死者の遺したものに」への〈改作〉という評価のもとに片づけられてきた。それは現代文学の研究が作家の自作紹介によつて規定されることの多い事例の一つといつてよい。その意味で、研究者は作家と共犯関係にある。李恢成自身が自作年譜のなかで「その前夜」を習作あるいは改作と述べていることがこの作品の運命を決定づけたと想定できるのだが、はたして作者のいうことを無批判に受けとめてよいのだろうか。本稿は現代文学研究にありがちな作家との共犯関係を断ち切るために、こうした疑問から出発するものである。

そこで要求されるのは、作者自身による習作と改作（もしくは原作）という言葉説を一種のレトリックとして捉えなおしてみることであろう。ある作品が習作で、しかも改作せねばならないものだとすると、当然「未熟」で「完成度」の低いものであろうという先入観にとらわれがちになるのではあるまいか。ところが、「その前夜」は雑誌の懸賞に入選した小説であり、習作とはいいがたい。それに加えて「死者の遺したものに」に改作されたといえども、改作の程度がはなはだしく、同一作品とみなすには限界がある。にもかかわらず、前述したように両作品はほぼ同一作品として扱われてきた。それは作者の目論見どおり、習作と改作というレトリックが浸透することによつて、「その前夜」が〈原作〉として、すなわち自然と「死者の遺したものに」の不完全な状態としての位置づけがなされ、一九六四年という同時代的意義が見えにく

くなつた結果といえる。

では、作家の自己評価によつて見えにくくなつたものとは一体何なのか。こうした問いを立てるとき視野に入ってくるのは、やはり在日朝鮮人作家李恢成と雑誌『統一評論』との関係、すなわちマイノリティの作家とその読者共同体との関係であり、一九六四年当時の在日朝鮮人コミュニティ自体のおかれていた状況である。そこで本稿では、「その前夜」というテキストのもつ歴史性に注目することによつて、小説「その前夜」の新たな位置づけを試みる。そして、「死者の遺したものの」との間に横たわる〈改作〉というフィルターをとりのぞき、初期李恢成文学を捉えなおす視座をも見出してみたい。

## 二、書き換えられた第一章——父の死への眼差し——

「死者の遺したものの」と「その前夜」は、おおむね五つの章から成っている。前者は一行をあける形で章ごとの区切りを示しており、後者は一、二、三と番号を付すことでそれを表している。ただし、「その前夜」においてのみ五章のあとに☆印を挟んで場面転換が行われ、エピソードとしての役割が与えられている。このような章構成からすると、両作品ともに変化はないし、叙述量もほぼ同量である。外形的には二つの作品の異同も少ないように思えてくる。たしかに「死者の遺したものの」と「その前夜」との違いは、対応する場面を一々比較対照してその異同がすぐ分かるような簡単なものではない。それほど両作品はそれぞれに大量の加筆と削除とが施されている。

両作品のストーリーを簡単にまとめると次のようになるだろう。主人公が父の死を知らせる電報を受け取つて実家のある北海道に帰ることになる。そこでは主人公とその兄とがそれぞれ総連と民団という別々の同胞組織に入っているため、葬儀のやり方をめぐつてさまざまな葛藤が顕在化するものの、最後には無事父の告別式を総連と民団との共同で執りおこなうというものである。この要約に即して差異の目立つ点をあげるならば、「死者の遺したものの」の第五章のラストシーンはまもなく告別式が始まろうとし、東京から遅れてやってくる妻子を今か今かと待っているとところで終わっている。それは父の葬儀を共同葬で行うことで、主人公と兄の間にわだかまっていた葛藤が解消されたと解釈することが可能である。一方、「その前夜」のなかで告別式の場面が挿入されているのは第三章の最後である。ということは、「その前夜」の場合、

二人の葛藤が解消されることをテーマとしているのではないということであり、二人の葛藤の先になにかがあると考えなければならぬ。

以上のことからわかるように、「死者の遺したもの」は、「その前夜」の第四章、第五章、そして☆印以下を切りとったかたちで、第二章までのストーリーをふくらませたものといえる。こうした削除とともに、さらに注目しなければならぬのは第一章に施された大幅な書き換えである。小説の冒頭部分は読者が物語世界へ入っていく最初の入り口であり、そのため作者はあらかじめさまざまな材料を用意してある。その冒頭部分にあたる第一章が大幅に改稿されたのであれば、「その前夜」と「死者の遺したもの」とでは、別個のテーマ性をたどるようにストーリーが改められていると考えてよい。「その前夜」から「死者の遺したもの」へと改作される過程で施された第四と五章および☆印以下の削除はそうしたテーマの方向性の違いを如実に示したものと考えられる。したがって第一章の書き換えと第四章以下の削除とは同一の方向性にもとづいているという仮説を立てることができよう。そこで「その前夜」と「死者の遺したもの」の第一章を比較検討してみようと思う。

「その前夜」と「死者の遺したもの」における冒頭は、主人公の居場所が前者は飛行機のなか、後者は実家の部屋であるという違いによって、両作品の異同を一々比較対照することは難しいものの、全体的な流れとして類似性が認められることは間違いない。まず、本格的な書き換えの始まりと思われる箇所を引用してみよう。

【死者】もともとこの空の旅は、日常の僕にとって何らなじみのないものであった。それが父の死によっていきなり身近かになったが、やはり別世界のものにはちがいない。(略)ひよつとして、と調べてみた。これは秦植の悪ふざけによるものではなからうか？ あゝの秦植の——。だが、長兄が仕組んだいたずらとして電報を理解するのはまったく苦しまぎれにすぎなかった。まちがってもあの兄がそんな気の利いたことをするはずがないのだった。秦植と僕は仲が悪かった。最悪の状態ともいえる。(中略)

【前夜】基泰はけさ、そんなに慌ただしくして手に入れた航空券をじつとみつめていた。この券がいきなり自分の所有に属するようになった事情が彼にはうそのように思われた。まして現にこうして自分が飛行機にのっていることす

ら途方もない錯覚のように思われる。／＼しかし基泰はぼかすと胸に穴がいたような疼きを同時に感じていた。間歇的にしやくり上げるように胸がにぶく疼いた。その疼きは北上する飛行機のあるかなきかの響音と混りあって、彼をきびしい現実(reality)にひきすえていた。／＼基泰にとつてこの航空券は昨夜不意にうけとつた電報と何らかわらぬ意味をもっているのだ。／＼きのうは日曜日であった。(129)

【死者】——「死者の遺したもの」、【前夜】——「その前夜」、(以下同じ)

右の引用は両方とも生まれて初めて飛行機に乗っていることの新鮮さから父の死という現実(reality)に呼び戻される場面である。ここで本格的な書き換えの始まりというのは、父の死をめぐる内容の違いを指す。すなわち「死者の遺したもの」は父の突然の死にたいする信じがたさから、ひよつとしたら仲の悪い長兄の悪ふざけなのではないか、と考えようとするところから始まっている。それに対して「その前夜」は「きのうは日曜日であった」とあるように電報をうけとつた日の事実として語ろうとしている。このように主人公が父の死を現実として認知した瞬間、「兄のいたずら」と「きのうのこと」を思い浮かべるといふ行為は、はたしてこれから始まるうとしている物語とどう関係しているのだろうか。この小さな出発点の違いには、すでにその方向性が投影されているように思われる。

「死者の遺したもの」はその後もつばら家族の問題に焦点がしぼられる。突然の父の死を「むごい仕打ち」だとしながら、「そのむごさは誰かが仕向けたものというよりもともとわが家にあったのだという気がしてくる」という。そして「わが家は在日朝鮮人のどの家庭よりも暗くて陰うつな家庭ではあるまいか」と回顧する。僕がなぜこのように回顧せざるをえないのかを証明でもするかのように、昔の父の粗暴さ、たとえば家の中で喧嘩が始まったとき、包丁をとり台所へ走っていく父とそれを隠しに行く僕との短距離競走のエピソードや、高校生の時、父と話すことも厭わしく思えて、「オシ」になろうとしたことなどを並べ立てる。そしてそれと対照するかたちで、その父が孫には仏のようにふるまうことに対する口惜しさや皮肉も描かれている。

「その前夜」のほうはどうか。父の死はきのうの出来事のひとつとして時系列のなかに組み込まれている。記者である主人公の基泰は、日曜日にもかかわらず、衛星通信から流れてくる「南朝鮮」の学生抗争を原稿に直すために宿直をする。翌日からは「祖国往來要請団」の行進に加わる予定になっていたため、ズック靴を買うついでに妻と映画を見て帰宅する。

ニュースの時間になると、ラジオに首つびき状態になって耳を傾けていると、「四・一九の血の代価を求めなければならぬ」。四・一九の精神を受け継ごう」というような「南朝鮮の学生達のつきつめた言葉が浮かんでは消え」てゆく。南朝鮮人民の戦う姿や在日同胞の祖国を思う気持ちが一「祖国は必ず統一されるのだ」という感情の高まりを感じさせる。まさにその時、基泰はなぜ父が死ななければならぬのかを考えざるを得なかった。そこで生前の父を思い出すのである。正月に会ったとき、父にもっと強く「祖国」（北朝鮮）へ帰るよう勧めなかったことや、基泰と長兄との折り合いが悪いことを父は心配していたが、それは考え方が違うだけで、父が心配しているほど仲が悪いわけではないことなどが思い出されたのである。

このように「死者の遺したもの」が家族の中の父を描き出しているのに対して、「その前夜」は時代の政治的状況とからませて父のことを語り出していた。父が想起されるとき、その文脈が変更されたということは、父と主人公との関係が大きな比重を占める二つの作品において、父の位置づけが変わったということにもなる。さらにいえば、テーマそのものが変更されたということにもなる。異なるテーマに向って始まった小説内容は、当然のことながらその帰着点も違ってくる。第一章の最後はそれぞれのように締めくくられている。

【死者】 その結果、もはや父とは永久に話すことができなくなった。父はのぞんでいた統一の日を見ずに没した。いつかその日はやつてくる。その日を迎えたとしても、僕には父との果せなかった会話がいつまでも心残りとなりそうであった。(55)

【前夜】 何気なくつい目の電柱に目をとめたとき、彼はそこに「在日朝鮮公民の祖国往來自由を認めよ」と書かれた真新しいポスターを見たのであった。／かれの鼓動は不意をつかれたように高なつた。どうしたわけか、自分がいま川崎市より品川駅に向けて歩いているのだという錯覚にかかっていた。だがそれも束の間、かれはどつとおそつてきた悲哀と絶望につつまれていた。思わずかれは身を切られたように低く、ああとうめいていた。(186)

「死者の遺したもの」は、主人公が父と自分との間に昔から横たわっている心の壁のせいで、まともに父子の会話を交

わすことすらできなかつた「心残り」を後悔している。家族と父の関係を中心に小説が展開する以上、読者はその「心残り」が何であるのかを十分想像することができるといえる。しかしそれは反対に、「その前夜」のほうは父を失った「悲哀と絶望」のさななかにもかかわらず、主人公は「在日朝鮮公民の祖国往来自由を認めよ」と電柱に貼られたポスターを見逃すこととはないし、自分も祖国自由往來運動に参加しているという「錯覚」にとらわれたりしている。両作品の第一章の叙述の差異は、どのような文脈（背景）の中で父の死を凝視しているのかという眼差しの違いでもある。父の死をめぐって「死者の遺したものが主人公と父の關係を通して父の死を考えているとするならば、「その前夜」はイデオロギーの高揚感の文脈の中に父の死を握えているのである。

二作品において、父の死がどのような文脈の中で捉えていたのかという点を考えるとき、語り手の変化もまた非常に重要な問題をはらんでいる。というのもその変化が作家の強烈なメッセージを伝えているからだ。作家は改作にあたって語り手までをも変えていた。「その前夜」は第三者的（客観的）語り手が存在し、その視点から「基泰」のことを語っていた。しかし「死者の遺したものは一人称の語り手である」「僕」が直接語るといふ形式になっている。その差異はまず、前者が政治的イデオロギー的状况の正確さを保証するために取られた措置であり、語り手の客観性という前提を形作ったうえで、主人公に父の死の意味を考えさせるという形式をとっている。それに対して、後者は家族という枠内で父の死を語るといふ形式である。そのため、第三者より「僕」という一人称のほうが適切であることはいうまでもない。

以上のことから、「その前夜」から「死者の遺したもの」への改作が単純に習作の完成度を高めるための結果であるとするよりは、何らかの外部的、あるいは内部的要因との相互作用によって作家が改作に踏み切ったものと考えられる。とはいえ、改作には大きく分けて二つの結果が期待できるであろう。一つは基本的な骨組みはそのままにし、原意をより明確にするために若干の加筆・修正を行なうレベル、もう一つは全く別の作品として生まれ変わる可能性がそれである。だが、これまでの「その前夜」論において問題となるのは、「死者の遺したもの」との比較検討という基礎的な作業なしに同一作品として取り扱ってしまう性急さであった。「その前夜」と「死者の遺したもの」とはそれぞれ独立した別個の作品であるといつても過言ではない。第一章の書き換えからも明らかのように、両作品は父の死というモチーフを共有しているものの、決して同じ方向性をたどっているわけではない。一九七〇年前後の作者は、一九六四年の作品をそのまま一九六四年らしく染め上げることがはなかつた。それには「その前夜」が総連色の濃密な時代的コンテキストと対話しつつ編

まれていたからであろう。

「死者の遺したものを」「その前夜」の完成型とみると、父の死を見つめる視線が政治的イデオロギー的状况からあくまでも父子の關係性へと限定されていったということは、裏を返せば、一九六四年現在の作者は、父の死を、朝鮮半島をめぐる政治的状況の変化のもたらす一種の高揚感と結びつけて書くしかなかったという意味にもなる。ここで注意を払うべきことは「その前夜」が書かれた時代の状況であろう。というのも、稿者は「その前夜」の発表された雑誌『統一評論』が作品の方向性を決定づけ、一九六四年当時の政治状況が描かれていたと考えるためだ。次節ではこの点について考察するため、発表誌である『統一評論』と小説「その前夜」とのかかわりに焦点をしぼることにする。

### 三、募集する〈論文〉、当選する〈小説〉

「その前夜」は一九六四年九月に『統一評論』という雑誌に発表された。雑誌『統一評論』はタイトルからも分かるように、主に朝鮮半島情勢をめぐる政治、経済、社会問題を取り扱う政治評論誌である。もちろん文芸欄もあるにはあるのだが、「その前夜」が掲載される経緯を確認してみると、たんに政治雑誌に掲載された文芸作品という枠組みではおさえきれない問題をはらんでいるように思われる。というのは、「その前夜」は『統一評論』が創刊三周年を記念して行った「懸賞論文募集」の入選作なのである。ここに雑誌側の要請する「論文」と李恢成の作品のジャンルのギャップに不可解さをおぼえさせられよう。『統一評論』十八号（一九六四年三月）に掲載された創刊三周年記念懸賞論文募集の要綱は当然のことながら、『統一評論』という雑誌の性格にふさわしい「論文」を募集していた。すなわち募集する時点で期待されたのは、朝鮮半島情勢をめぐる政治、経済、社会問題を取りあげた「論文」であり、文学作品は選考の枠にはなかつたはずである。それにもかかわらず、「その前夜」は募集された「論文」のなかから選択され入選を果たしている。このような選択に至るまでの経緯に一貫性を持たせるものはいったい何なのかという疑問が生じる。

そこでやはり気になるのが、『統一評論』側の発表の仕方であろう。まず、結果の発表時期が当初の予定よりも遅れているという事実がある。予定されていたのは七月発行の二十号であったが、実際の発表は二ヶ月遅れて九月発行の二十一号である。雑誌社の都合上、発表が一ヶ月や二ヶ月くらい遅れても何の不思議はないのかも知れない。しかし問題なのは、



創刊三周年記念「懸賞論文募集」のはずが、その発表では「懸賞募集結果発表」というふうに「論文」の二文字が削除されている点である。しかも、当初は四つの賞を設けていたにもかかわらず、結果は「入選・小説『その前夜』と一編だけ記され、掲載もそれしかない。結果発表案内には「言語、歴史、経済、文学等の各部門にわたって応募原稿が寄せられました」とあるが、受賞作が「その前夜」のみというのは、他に優れた論文がなかったためであろうか。それにしても一編のみの受賞作が予定の特賞、あるいは一等、二等、佳作のいずれでもなく、当初はなかった新しい「入選」という扱いだったことには違和感を覚えさせられる。

疑問点についてさらにいうと、入選となった「その前夜」は最初の応募規定を何一つ守っていないという点があげられる。当初の応募規定を細かくみてみると、締め切りは五月末で、枚数は四百字詰め原稿用紙二十枚前後、結果発表は二十号（七月）と予定されていた。ところが、四百字詰め原稿用紙二十枚前後とあった枚数は、「その前夜」では規定の六倍をゆうに超え、一四〇枚に肉薄している。また、締め切りも五月末のはずなのに、小説の最後に八月に書き上げた旨が書きこまれている。周知のとおり、応募規定とは主催者側と応募者が共有する規則であり、応募者にはそれを守る義務がある。もし守られなかった場合、欠格事由となり審査員の目に触れることさえできないはずである。ところが、「その前夜」は応募規定から大幅に逸脱しているにもかかわらず、堂々と「入選」したのである。

規定外の応募作のために、あえてその規定をも変更してしまった『統一評論』の「趣旨」とはいかなるものであったのか、ここで確認しておきたい。『統一評論』の懸賞論文募集の要綱をみると、そこには創刊三周年を迎えられたことは「祖国の平和的統一」を願う一念から本誌によせられた読者各位の理解と暖かい支持・援助のため」であり、「感謝の意を表す」とともに、「読者諸賢の要望にこたえる」ため、「創刊三周年記念論文を募集することにな」ったと記されている。

「読者諸賢の要望にこたえる」とはどういう意味なのか。たとえば単なる創刊三周年を記念してなにかのセレモニーの一環として「懸賞論文募集」を設けるといふことなのか、それとも特定の「要望」がどこかからあったのか。現在ではそれを知るすべはないが、『統一評論』を支えているものがあたかも読者各位の「祖国の平和的統一」を願う一念であるかのような論調であることは確かだ。雑誌のタイトルからも窺えるように、そもそも『統一評論』そのものが祖国の統一を願う思いから出発していることはいままでもない。ということは、裏を返せば、読者各位に求められたものも、同様に「祖国の平和的統一」を願う一念ではないだろうか。

さらに、創刊三周年記念懸賞論文募集の案内が載せられた『統一評論』十八号の「編集後記」を参考にすると、この時期に日朝鮮人社会において争点となっていた問題が何であったかがより明確になる。一九六四年は長年にわたって交渉してきた日韓会談がいよいよ最終段階にさしかかり、韓国と北朝鮮にとってはもちろんのこと、日本に在任する朝鮮人にとっても政治的な意味で最大の関心事となっていた。そのようなさなか、『統一評論』は日韓会談のもたらす最も大きな弊害として「南北に分断された祖国の現状を固定化」させ、「祖国の平和的統一の重大な障害」となることを懸念していた<sup>10</sup>。このように、祖国の分断に端を発した在日同胞の分裂、それが結果的には祖国の統一を阻む方向に作用する点に関しては、多くの在日同胞の間でも共有していた問題意識であったといえよう。ちょうど十八号の随想欄には、こうした状況を裏づけるような一読者の投稿が見られる。それは「思想の違いや考え方の相違を理由に反目し合う」ことは恥ずかしいことで、「祖国の平和統一の日を遅らせる一つの大きな障害なのだ」と強調したうえで、お互いに理解し合うよう努力することを訴えていた。組織の指導部にいるわけでもない一般読者が日頃の出来事の中で感じたことを綴ったこの随想も編集後記と同様の問題点を指摘しているのだ。南北に分断された祖国の現状を固定化させることによって、同胞たちも「北か」「南か」の選択を迫られるはめになり、結果的に対立せざるを得なくなっている現実が一般読者の目にも直視できたのである。

このような時代的狀況や『統一評論』に掲載されるまでの経緯をたどってみると、この小説からは祖国統一に向けたプロパガンダの性格が強く感じられてならない。とくに、「その前夜」というタイトルに注目するとき、「その前夜」における「前夜」という言葉が、祖国統一の「前夜」を意味する比喩となり、プロパガンダ的要素をかたちづくっていると考えられるのである。さらにそこから「その前夜」を習作と片づけることへの問題性もおのずと浮かびあがってくる。「その前夜」は一定の読者層を持つ雑誌メディアの懸賞募集に応募し、多くのなかから選ばれたものである。したがって仮に「その前夜」が李恢成にとつては試作であるとしても、それにはすでに習作以上の評価が与えられ、一つの「芸術作品」として成立しうることが認められたものと判断される。つまり「その前夜」は辞典の意味合いに則して練習や試みのためにつくった作品であり、だからこそ改作する必要があったといった簡単な図式では捉えきれない、より複雑な問題をはらんでいたのだ。

#### 四、コンテクストとの共鳴——戦略としての「四月十九日」——

すでに述べたように、「その前夜」と「死者の遺したものは父の死というモチーフを共有しており、両方とも一枚の電報が主人公の平和な日常を動揺させ、思わぬ方向へ連れ出しはじめる。それは父の訃報を知らせる文面にほかならないのだが、二作品においてその電報が舞いこむのは「昨日」となっている。しかし「死者の遺したものに」においては、それが特定不可能な「昨日」として設定されている点特徴といえよう。「もうこぶしの花が咲く季節」(56)であるという叙述があるので、なんとなく北海道の春先だろうという予測がつく程度である。

一方「その前夜」は、「よし、今日はただじゃ済まんぞ。四月十九日だからナ。」(128)とあるように、はっきりした日付を確認することができる。言い換えれば、「その前夜」では何らかの必然性をもって挿入されていた日付が「死者の遺したもので」では必要でなくなったとも考えられる。さらに「その前夜」が前節で考察したように、父の死を時代の政治状況・イデオロギー状況との関係のなかで見つめようとしたことを想起すると、日付の特定を見逃すわけにはいかない。なぜなら、日付の特定は父の死をいかなる政治状況・イデオロギー状況と結びつけようとしているのかを示す装置であったと想定できるからだ。

そこで、ひとまず昨日という時間について注目したいのだが、基泰が「その日一日はどんなに平和な営みの中に過ぎていったことだろう」(132)と回想するときの昨日とは、ほかならぬ四月十九日である。このことを念頭においた場合、『統一評論』が一九六〇年四月十九日学生市民を中心に韓国で起きた全国民的革命運動に触発され、その一周年記念日である四月十九日に創刊されたという事実を想起せざるをえない。四・一九学生市民革命と呼ばれるこの出来事は重要な歴史的事件であった。となると、作者があえて時間設定を四月十九日に据えたのは単なる偶然ではなく、前節で指摘した「その前夜」のプロパガンダ的性格を探るとき、必然性へと転化する可能性を多分にはらんでいるとみてよからう。

では、あまりにも「平和な営みの中に過ぎていった」とされる基泰の昨日の足取りをおいながら、その昨日と基泰自身がどんな人物として造型されているのかを検討することしよう。

きのうは日曜日であった。／宿直をおえた基泰は朝日をうけ始めている朝鮮日報社の玄関から出てきた。彼はひよいひよいと大股で電車道路をわたり切ると、何気なく今しがた出てきた朝鮮日報社の建物を振り返った。／七階建ての

社屋は朝のやわらかい陽ざしに照らし出されくつきりとそびえていた。屋上を見上げると、そこにアンテナが触手を天に張っていた。／＼つきつき、このアンテナは南朝鮮の事態を捉えていた。受信機は南朝鮮での学生抗争をピー・ピーという雑音の中から記録していた。基泰は音波再生器に刻々とうかびあがるソウル、大邱、木浦……という字体に鋭どく目を注いでいた。(129)

これは宿直を終えた基泰が妻との待ち合わせ場所に向かうため、朝鮮日報社の建物から出てきた場面である。基泰の政治的スタンスは、物語の進行につれ、はつきりと提示されるが、この引用文はそれをはじめて示すものとして注意される。基泰の勤め先が「朝鮮日報社」という新聞社であるのだが、この「朝鮮日報社」は総連の傘下機関として総連の出版宣伝事業の拠点をなしていた「朝鮮新報社」を連想させる。彼が退社前にこなしていた仕事は、衛星アンテナから伝えてくる「南朝鮮の事態」を原稿に直すことであつたことも、その連想が的外れでないことを示している。

もしかすると「日曜返上になるかもしれない」(108)と妻にいつておいたことからすると、夜を徹したかもしれないほど仕事が忙しかつたはずである。しかしひと晩の宿直を終え退社する彼の姿に、疲れている気配はまったく見うけられない。徹夜のすえへとへとに疲れた足取りどころか、むしろ「ひよいひよいと大股」で歩いている姿にはある軽快さすら感じられる。いったい何が彼にそうさせているのだろうか。それは仕事がやつと終わつたという解放感のせいかもしれないし、親子そろつてはじめて映画を見に行くという喜びからくるものかもしれない。しかし、「ひよいひよいと大股」で電車道路を渡りきつた後の彼の行動に注意すると、その謎は明らかになる。つまり、基泰は玄関から出てきて、まっすぐ待ち合わせの場所に向かうのではなく、わざわざ立ち止まって「朝鮮日報社の建物を振り返」るのである。そして、社屋が「朝のやわらかい陽ざしに照らし出されくつきりとそびえてい」ることをいまさらのように確認する。ここでは社屋が祖国のメトニミーとして用いられていると考えてよからう。とすれば、彼がそのように確認したのは、祖国に明るい未来が到来することを確信するような気持が投影されているからである。なぜ彼はそう確信することができるのかといえば、今しがた携わっていた仕事にたいする期待感があるからだ。彼は「南朝鮮の学生抗争」に関する報道に大きな関心を寄せ、その成功を望んでいる。その学生抗争とは日韓会谈反対デモとして、南朝鮮の学生たちが「四・一九記念日を期して極限闘争」(108)を行っていることを指すものである。彼は音波再生器に刻々とうかびあがる「ソウル、大邱、木浦……」とい

う地名の羅列からデモが全国的な規模で拡がっていくことを読みとり、ひよつとすると成功するかもしれないという期待感が彼の足取りを軽くさせているのである。

ここで、「四・一九記念日を期して」の「韓日会談反対デモ」をもう一度歴史的コンテキストのなかにもどしてみよう。なぜなら、これは前節でも述べたように、『統一評論』の姿勢を反映しているからだ。一九六〇年代に入って南北朝鮮は厳しい対立段階を迎えていた。南の韓国では六一年五月に成立した朴正熙軍事政権が日本の資本を引き入れての（近代化）路線にふみきり、権力基盤の補強を図るため、積極的に日韓会談を推進していた。だが、韓国の民衆・在日社会・北朝鮮側は日韓会談の推進が自主的平和的統一に対する阻害要因となるばかりでなく、日本帝国主義の再来であると真正面から批判すると同時に、大々的に反対デモを展開した。そして、その反対デモは六三年から六四年にかけてピークに達したのである。しかし、この時期韓国における反対デモの直接的な導火線となったのは、漁業問題や屈辱外交に対する反発であった<sup>12</sup>。したがって、日韓会談を統一の阻害要因、あるいは日本帝国主義の再来とするのは、どちらかといえば北朝鮮側の論理といえる。

四月十九日、基泰の頭の中を支配していたもう一つの出来事は、祖国往來要請団のことである。じつは基泰が妻と待ち合わせしたほんとうの理由も、翌日から「祖国往來要請団の行進」に参加するためのズック靴を頼んでおいたからだ。映画を見て帰ってきた彼は、ラジオに首つびき状態になり、南朝鮮のデモの行方に耳を傾けるものの、彼により身近なものとして差し迫った問題は祖国往來要請団のことであった。

夜になってから、ひたひたと基泰の心を積みあげてくるものがあつた。それは南朝鮮の学生達の荒々しい足音とはちがひ、静かな怒りにもえる足音であつた。／祖国への往來の自由を要求し、在日同胞が六百里の道のりを歩みつつけている足音であつた。(130-131)

引用文からも分かるように、その夜「ひたひたと基泰の心を積みあげて」きたものは、南朝鮮のデモのことではなく、「静かな怒りにもえる足音」に喩えられた祖国往來要請団の行進のことである。彼が南朝鮮のデモに期待をいだいていることは否定できないが、それはあくまでも相手側の問題にすぎず、自分自身が当面している問題は、自分が属している総

連で推進している仕事への期待である。祖国<sup>13)</sup>自由往来要請運動は、総連が祖国への自由往来を要求して展開したもので、一九六四年当時盛り上がりを見せていた。実際「祖国往来要請大行進」というのが一九六四年三月から四月までの一ヶ月あまりにわたって、大阪―東京間で広げられた。小説では祖国への自由往来を希求してはじまった要請団の行進が大阪を出発し、ついに品川まできており、彼も今日(二十日)から記者として参加することになっていて、と描かれている。

「その前夜」は、小説の時間的起点を四月十九日に設定することによって、同時進行的に行われていた歴史的事実を意図的に組み入れることで、『統一評論』の懸賞論文応募案内の趣旨や編集傾向に沿う内容となっているのだ。さらに、本稿では論外にした小説の後半部(第五章と☆印以下)において末妹の伊玉が祖国往来自由運動に参加することを決意する場面や、日本人である床屋の主人までもが「ほら、あれ、何といったかな。……祖国往来……運動。私はやっただですよ。父さんがやってきて、これこれだというんで、ちゃんと署名したんですよ。」(106)と言わせる場面をもって物語を締めくくっていることからしても、その意図は明らかである。つまり、「その前夜」は目下総連を中心に展開されていた祖国往来自由運動への直接的な呼びかけであり、またその宣伝の一環としての役割を果たしていたといえよう。

## 五、むすび

本稿は、「その前夜」が〈習作〉で、さらに「死者の遺したもの」との関係においては〈改作〉という座標軸で、作家が読者に情報を提供しようとすることで、何かが隠蔽されることへの問題提起であった。しかし以上で見てきたように、「その前夜」をそれらの用語で締めくくることが危うさが浮かびあがったと思われる。「その前夜」は懸賞をとおして正当な評価を獲得したものであるし、第一節で考察したように改作とはいつても「死者の遺したもの」と同質のものではないからだ。両作品の第一章を比較検討しただけでも、両方の異質性は明らかである。すなわち、両作品は父の死を共通のモチーフとしながら、その死を見つめる眼差しはかなり異なるものであった。「その前夜」が父の死を政治的状況のなかで捉えていたのに対して、「死者の遺したもの」は父の死を常に主人公自身を中心とした家族との関係の中へと置き換えている。さらに『統一評論』という雑誌の性格と深く結びつけて創作された「その前夜」であるがゆえに、同時代的コンテキストの中へ入ることを心がけている。たとえば、父の訃報を受け取る日付をわざわざ「四月十九日」にすることに

よって、「南朝鮮」における「四・一九記念日を期して」の日韓会谈反対デモや、ちょうど同時期に総連が展開していた「祖国自由往來要請運動」などがテキストに入りこんでいることがまさにそれである。それはいうまでもなく『統一評論』の編集方針の延長上にあるものであった。

したがって「死者の遺したものの」のほうからいえば、この作品は「その前夜」にあった政治性もしくはイデオロギー性が抜け落ちていくわけである。だが、それがそのまま政治性、あるいはイデオロギー性の欠如を示しているわけではない。むしろマジョリテイの読者とマイノリティの作家という別次元の問題が浮上してきたと捉える必要がある。作家李恢成が総連のプロパガンダ小説として入選した「その前夜」を闇の奥にしまっておこうとしたことは一つの戦略ではなかったか。それは日本人というマジョリテイを意識して行われたものであり、「死者の遺したもの」もまた、「その前夜」とは異なる様相をもって行われた調停の産物と捉えることができる。では、マイノリティの読者共同体に対する作家の戦略と、マジョリテイの読者共同体に対するそれがどう変わったのか。これが次に検討すべき課題となるであろう。

## 注

本稿に引用した李恢成のテキスト「その前夜」は『統一評論』（一九六四年九月）、「死者の遺したものは『群像』（一九七〇年二月）に拠り、引用はページ数のみを付した。

なお文中では、特定する場合以外には南北分断による国名や呼称ではなく、一般的な総称である朝鮮、朝鮮人という用語を用いる。また大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の略として、それぞれ韓国・北朝鮮と表記し、さらに原文から引いた場合は「韓日」としているが、ほかはわかりやすく日韓という記述方式をとっている。

- (1) 従来李恢成の〈処女作〉は一九六九年二月に群像新人賞を受賞した「またふたたびの道」とする見解が支配的であるが、稿者はそれに先立って一九六四年九月に『統一評論』に発表された「その前夜」を彼の〈処女作〉と見なしてよいのではないかと考える。なぜなら「その前夜」は『統一評論』の懸賞募集に応募し入選するなど、単なる〈習作〉以上の意味をもつと考えられるからである。にもかかわらず、「その前夜」がこれまで見落とされてきた背景に関しては、金貞愛「李恢成の初期作品研究——「その前夜」と「死者の遺したもの」を中心に——」（平成十二年筑波大学大学院文芸・言語研究科中間評価論文）を参照されたい。

- (2) 創刊は一九六一年四月十九日、発行は統一評論社で、月刊誌として現在まで続いている。政治評論を中心とするが、初期の執筆者の中には金達壽、朴春日、呉林俊、安宇植といった作家や文芸評論家の名前も見られる。総連とは、在日本朝鮮人総連合会の略称で朝鮮民主主義人民共和国を支持する在日朝鮮人の団体である。
- (3) 例えば文庫本のあとがきでは、「朝鮮人の組織に入つて活動していた二十代に、二編の短篇を書いているから、習作といえ、これくらいであろう。」〔著者から読者へ〕「またふたたびの道／砧をうつ女」講談社、一九九一年、二七二頁と述べている。
- (4) 年譜としては『新鋭作家叢書』と『芥川賞全集』とのあいだに『現代の文学36』（講談社、一九七二）掲載のものがあるが、そこでは一九六三年の欄は「二、三の習作を書くかたわら」となっており、一九七〇年の欄も改作の旨は記されていない。さらに、実際の作品の発表年度と年譜の記載にはくい違いが見られるが、これに關しての詳細も前掲金論文に詳しい。
- (5) 管見の知るかぎり、「その前夜」に言及した先行研究および批評は見当たらない。唯一、北田幸恵が「その前夜」について触れているのだが、そこで説明されている内容は「その前夜」というよりはむしろ「死者の遺したもの」においてより相応しいのではないかと考えられる。
- 〔作家案内〕「またふたたびの道／砧をうつ女」講談社、一九九一年
- (6) 在日本大韓民国居留民団の略称で、大韓民国を支持する在日朝鮮人の団体。
- (7) 「創刊三周年記念懸賞論文募集」〔統一評論〕一八号、一九六四年三月）一四四頁。
- (8) 「創刊三周年記念懸賞募集結果発表」〔統一評論〕二二号、一九六四年九月）一一五頁。
- (9) 前掲「創刊三周年記念懸賞論文募集」を参照。
- (10) 「編集後記」〔統一評論〕一八号、一九六四年三月）一四四頁。
- (11) 朴光淑「赤い花」〔統一評論〕二二号、一九六四年九月）二二六頁。
- (12) 高崎宗司「検証、日韓会谈」〔岩波新書、一九九六年）一五〇—一五一頁。
- (13) 梁永厚「戦後・大阪の朝鮮人運動」〔未來社、一九九四年）二〇三頁。

付記 本稿は、平成十二年度筑波大学大学院芸芸言語研究科に中間評価論文として提出した「李恢成の初期作品研究——『その前夜』と『死者の遺したもの』を中心に——」における第二章の一部を加筆訂正したものである。